

---

# アンチリアル

スティーヴ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンチリアル

### 【Nコード】

N3215I

### 【作者名】

ステイヴ

### 【あらすじ】

悪魔、悪霊、妖怪など闇の存在を狩る影の組織「神童会」。そのメンバーである新木晴は狩る賞金稼ぎ、桐島昭は復讐のため、須藤玲は人々を守るため、日夜、奴等と戦う。海外ドラマ「スーパーナチュラル」を元に造ったオリジナルストーリーです。

## 登場人物紹介（前書き）

この小説は以前に私があるブログサイトに掲載した作品です。そのサイトが閉鎖することによりこちらに移転させていただきました。連載していくに当たって暴力描写や性描写などができる場合もあります。

## 登場人物紹介

### 登場人物

・新木晴<sup>アラキハル</sup>・・・賞金稼ぎであり無鉄砲で向こう見ずな性格。しかし仲間思いで危険な相手にも勇敢に挑む。武器を使うことよりも喧嘩で鍛えた殴り合いを好んでいる。悪霊、悪魔、妖怪などを討伐することを目的とした影の組織「神童会」のメンバー。パートナーである昭とは喧嘩が絶えない。

・桐島昭<sup>キリシマアキ</sup>・・・冷静沈着で仕事は確実に遂行する。晴と同様仲間思いではあるが、単独行動もしばしば。晴とは言い争いも多いが、嫌ってはいない。晴と同じく「神童会」のメンバー。過去に実の姉を悪魔に殺害され、姉を殺害した悪魔を追い続けている。

・須藤玲<sup>スドウレイ</sup>・・・男勝りで生真面目な性格、少々ドジ・・・。晴と昭の元で教育を受ける。射撃、弓矢の名手でもありテコンドーの有段者、悪霊や悪魔を心底嫌っているが、危害の無い霊に対しては優しく接する。「神童会」の新米メンバーで悪霊、悪魔で困っている人を助ける旅に出る。

・総帥<sup>ソウスイ</sup>・・・「神童会」の最高権力者。

・桐島恵子<sup>キリシマケイコ</sup>・・・昭の姉で「神童会」のメンバーであったが、任

務中に悪霊に殺害された。

・カシワギコウイチ 柏木幸一……「神童会」の幹部で晴や昭に任務を与え、その度に必要な武器や道具を取り揃えてくれる。

悪魔、悪霊

エンマ 閻魔……悪魔、悪霊、妖怪を束ねる闇の長。

クロオニ 黒鬼……閻魔の部下であり恵子を殺害した張本人。三本の角と黒い眼が特徴であり、様々な超能力を持つ。退治するには銀の弾丸が必要。

アカオニ 赤鬼……閻魔の部下の一人。二本の角と赤い眼が特徴であり、人間の機械と合体する能力を持つ。元々は吸血鬼で、退治するには首を切り落とす。

アオオニ 青鬼……閻魔の部下の一人。一本の角と青い眼が特徴であり、一度退治された悪魔、霊、妖怪を蘇らせる能力を持つ。退治するには銀製の刃物で心臓を刺す。

シロオニ 白鬼……閻魔の部下の一人。角の無い頭と白い眼が特徴であり、風と冷気を操る能力を持つ。退治するには炎で焼くこと。

シンドウカイ  
神童会・・・悪霊、悪魔、妖怪などこの世のものでない存在を討伐する影の組織。警察とも裏で繋がっており全国各地の不可思議な事件の情報をいち早く得ることができる。詳しい組織内容はメンバーにも明かしておらず組織の全貌を知る人間は少ない。

## 道具

E M F 探知機・・・悪魔や悪霊が通った後に残る電磁波を探知できる機械。

霊水・・・悪魔、悪霊、妖怪に効果のある水。

塩・・・邪気を払うことができる。

銀の弾丸・・・通常の武器が通用しない妖怪に対して使用する。

## 第一話 晴と昭

「東京都 多摩郊外 11月24日 21時10分」

繁華街から離れたこの場所ではいくら大都会東京都とさえも現在では闇が多くを支配している。

新木晴と桐島昭がなぜこんな場所にいるかと言つとこの世のものではないものを追っているからだ。

「ここに逃げ込んだみたいだな」

「ああ、手こずらせやがってさつさと退治しようぜ、昭」

レミントンM31ショットガンを装備した晴とM19コルトを装備した昭は荒廃した工場の門の前に立ち敵との戦いに備えていた。

相手は今まで9人も人を殺害してきた連続強盗殺人犯の悪霊、さらに悪霊となった現在までにさらに10人も人間を殺害している、低級だが無論人間ではないため鉛玉は通用せず、彼らの銃に装填された弾丸はすべて岩塩を加工して造つたものだ。

「もう一度言う、晴、お前が奴を引き付けてる間俺が死体を見つけて火葬する。これでいいな!？」

「わあーってるよ!何度も言うんじゃないねえ」

この廃屋の中には殺人犯の死体があり、それを火葬すれば悪霊は消滅する。

「よし行くぞ」

昭はそう言うと金網をよじ登り、続けて晴も金網を登る。

建物の中はひんやりと冷たい空気が流れ、壁には落書きや長い年月が流れた証拠にシミやカビがびっしりと蔓延り、床にはゴミや何かの機械部品などが散乱している。当然電気は流れていないので電灯はつくわけがない、二人は白色LED懐中電灯を頼りに足を進めた。

さらに昭はポケットからEMF探知機を取り出し悪霊の痕跡を調べ、EMFは2階へと続く階段の所で反応を示す。



「お前は2階を探せ、俺はこの階を探す」

「うるせえな！いちいち命令すんな！」

毒を吐く晴を尻目に昭は足を進め暗闇の中に溶け込んでいった。晴もショットガンを構え2階へと続く階段を登るが長年に渡って放置されていたのか階段の所々には錆びのため足を進めるごとに金属が軋む音がする。

2階も同じく錆びだらけで長い間誰も訪れなかったことが解かる。晴は階段を登ったすぐ傍にある部屋のドアを開けた。どうやらここは事務室らしく、古びた机の上には埃にまみれた紙や筆記用具、何か食べ物の包み紙などが散乱している。ドアの外に気配を感じたのは直後だ。

「出たな」

銃声と争うような物音を聞いた昭は一人呟いた。しかし昭は冷静を保ち、死体探しを続けた。

犯人が身を潜めそうな場所は限なく探したが未だにし死体を発見、火葬は出来ていない。

「おかしい、なぜ死体がどこにも無いんだ」

上の階では未だに銃声が鳴り止まず、争う音もさらに激しくなってきた。昭は感じ、さすがの昭にも焦りの色が顔に現れ始めた。

「奴は追われる身の人間、そんな人間が身を潜める場所……」

昭は考えを巡らせ、ふと自分の足元を見た

「……！！そうかつ！」

「うぐっ……がはっ」

壁に体が叩きつけられ咳きこみ一瞬呼吸が出来なくなる。シヨットガンを撃とうにも戦いの最中で弾詰まりを起こし使用不能になった。

「このクソツタレ野郎……」

喧嘩慣れしている晴だが実体のない相手に対しては自慢の拳も通用しない。

「カクゴシロオマエガニジュウニンメノエモノダ」

悪霊はくぐもった声でそう発し、念動力で周りの机や椅子を宙に浮かせ晴に狙いを定めた。

「覚悟するのはてめえの方だぜ」

晴はこんな状況でも相手に毒を吐き続ける。

「ウルサイ、サアジゴクニオチロ!!」

晴は目を閉じ覚悟をきめるが、その途端悪霊の体が火に包まれ悲痛な叫び声とともに姿が消えた。晴は安堵の溜息を吐きその場に座り込んだ。

「遅えよあのバカ……」

晴はゆっくりと立ち上がり服に付いた埃を払い落した。体の所々が痛むが、それに耐え自分のショットガンを持ち部屋を出た。

1階へ降りると既に仕事を済ませた昭が入口の壁にもたれかかりタバコに火を付けていた。

「遅かったな」

「何が遅かったんだコノヤロー！！てめえがさっさと死体燃やさねえからこっちは危うく死にかけたんだぞ！」

会って早々喧嘩を吹っ掛けてくる晴に対して昭は冷静に答えた。

「無理もない、まさか死体が地下にあるとは思わなかった」

その後、昭は地下室の存在に気づき、ある一室の床にあった隠し扉を開け入った空間の隅に横たわる死体を見つけ、手早く死体に清めの塩を振り灯油をかけ一気に火葬した。

「おい、もう出るぞ。こんな所に長居は無用だ。」

昭はそう言うのとタバコを足でもみ消し、工場の傍に駐車してある車へと向かった。

「ちよってめっ、まだ話は終わってねえぞ!」

晴も昭に対して文句を言いながら足を進めていった。

「東京都 地下 11月25日 13時49分」

日本の人口の10分の1がこの東京都にはいる。昼夜を問わずして都内には賑わいを見せ、日本人だけでなく異国の人々も大勢ここにはいる。観光目的の人間、仕事目的のビジネスマン、人の目的は様々だが新木晴と桐島昭がここに来た目的は他の人々とは大分かけ離れている。

都心新宿にある外見は普通の雑居ビルの中に2人は入って行った。そして1階の廊下の先にある一番奥の部屋に彼らは入室する、部屋の中は閑散としており淀んだ空気が支配していた。

「ここで間違いないんだろうな!？」

「ああ、柏木さんから送られてきたメールだとここがそうだ」

賞金稼ぎでもある彼らはこの場所で柏木から今回の仕事の報酬を受け取るためにこの雑居ビルに来たのだ。しかし肝心の柏木はまだきていないようだ。

「大体あの人、俺達には厳しいくせに自分には甘いんだ。まったく

よく幹部が務まるもんだぜ」

「自分には甘くて悪かったな」

背後から聞こえた独特の低い声に晴はビクッと身を震わせた。そこには案の定柏木がいた。

「かつ柏木さん！？……いついやだなあ〜居るなら居るって言つてくださいよお」

晴の顔色は見る見る悪くなっていくがそんな晴に対して昭は気の毒だとも思わなかった。

「柏木さん、任務は遂行しました。約束の報酬を」

柏木は黙って背広の内ポケットから茶封筒を出し二人に渡した。

「へへっ、どうも。さあて今回の稼ぎは………つて、ええっ!?これだけっすかあ!!!?」

茶封筒の中には現金で5万円が入っていた。晴はこの結果に不満を抱き柏木に問いただす。

「柏木さ〜んあんなに苦労したのに……これじゃあ割に合わないっすよお!」

「馬鹿者、あんな低級の悪霊、これでも多いくらいだ。文句があるなら無理に貰わなくなっただっていいんだぞ!」

不満を垂らす晴に厳しく言った途端、晴は手のひらを返したかのよ



うに言う。

「いやいや」文句だなんてとんでもない！ありがたく頂戴いたします  
す」

ころころと性格が変わる晴に対して、柏木と昭は呆れて溜息をついた。

「柏木さん、次の任務は？」

現金を大事に抱えて有頂天気分になっている晴を尻目に昭が聞いた。

「お前たちのパソコンに既に送ってある。今回は少々厳しくなるかも知れんな」

「どんな任務でも確実に遂行するのが神童会の掟です。必ず良い結果をご報告いたします」

「そうか、では待っているぞ」

柏木はそう言つと部屋から出て行き、再び部屋には沈黙が戻つた。

「あんな悪霊これでも多い方！？チツキショー！なんだよ俺はあんなに苦労したのによぉ〜」

ビルから出て車に戻つた晴と昭だが、晴は相変わらず報酬の額に不満を漏らしていた。

「うるさい、静かにしろ」

運転席で次の任務の確認をしている昭に晴の不満は耳障りでしかなかった。

「なんだと！？お前不満じゃねえのか？」

「柏木さんの言う通りだ。俺は満足している」

パソコンの任務が書かれたメールを読みながら昭は答えた。

「へえへえそうかよ。どうせ俺はいつも除け者だよ」

晴は拗ねたように腕を組みながら車のシートに寄り掛かかり目を閉じた。

「寝てる暇があったら任務の確認でもしろ」

「うるせー俺は今機嫌が悪いんだ、寝る」

子供のような態度をとる晴にほとほと呆れながら昭はエンジンをかけた。

「勝手にしろ」

車は次の目的地にむかって走り出した。

完

## 第二話 狂気の村 前編

「三重県 御所山 12月1日 17時46分」

ここは三重県と滋賀県の境にある山「御所山」。観光スポットでもあるこの山は今の季節、冬山登山を楽しむ者も多く入山し、さらに山頂はスキー場にもなっており、シーズン中はスキーヤーやスノーボーダーも多く集まる。

しかし現実には、スキーヤーや登山者が遭難や行方不明になるケースもあり、山岳救助隊や警察にとっては最も警戒しなければならぬシーズンでもある。

ここにいるカップルもそう言った人々に苦労をさせる原因を作った張本人達だ。

「ねえ信二い、ほんとにこっちで合ってるの!？」

「大丈夫だ、あと少しで登山道が見えてくるはずだ」

このカップルは登山目的で御所山に入り、帰り道に迷い登山道を探し山の道無き道を進んでいるところだ。もちろん山の中では携帯のアンテナは立たず連絡も出来ない状況にいた。彼女の方は疲れ果てたらしく、顔にも疲労の色が浮かび上がっている。

「がんばれひとみ、早くしないと日が暮れる」

「ああーもう！！あたしもう歩けない」

そう言うと彼女は地面に座り込み、盛大に溜息をついた。そしてバッグから携帯を取り出し、アンテナが立ってないかチェックした。無論アンテナは立つはずはなく液晶には圏外の文字が表示されている。

「無駄だ、ここでは携帯は使えない。それよりも早く山から下りよう」

「うるさいわねえ！大体あんたが登山しようなんて言わなかったら今頃あたしはこんな目にはあつてなかったのよ！！」

ついに彼女の堪忍袋の緒が切れたらしく乱暴に怒鳴り散らした。そ

れを聞いた彼氏もさすがに我慢の限界が来たらしい。

「なんだとっ!?!俺だけのせいにする気か!?!お前だって喜んで行くって言ったじゃねえか!?!」

「なんですってえ!?!?」

その時、いがみ合う二人の前に一人の老人が現れた。

「どうなさったのじゃ?迷われたかな!?!」

喧嘩中の二人だったが、老人が問いかけると冷静になり、まるで天からの助けが来た様な顔で老人を見た。

「そうです!?!僕たち登山の帰りに迷ってしまって、お願いします道を教えてください!?!」

「よかったわ！もう駄目かと思っていたところなんです」

興奮して話す二人に対して老人はにこやかに微笑んだ。

「それはさぞかし大変だったじゃろう。よし、わしの村まで案内してあげよう。ついて来なされ」

「あっ！ありがとうございます！！」

そう言うと老人は来た道を引き返すかの様に歩きだした。彼らも既に疲労困憊であるう体に鞭を打ち老人の後について行った。

「ところでおじいさんはこんな所で何をしてたんです？」

ひとみがそう尋ねると老人は間をおかず言った。



「うん？ああ、散歩じゃよ。この辺りはわしにとって庭みたいなものじゃからな」

確かに土地勘がある人にとってはこんな山でも知り尽くしているのは当然ではある。しかし、いくら地元の人で土地勘がある人でも日が暮れかけているこんな時間に散歩をする人など果たして居るのだろうか。信二は少なからず不審に思うが、この状況ではそんな事に構っている余裕も無く、とにかく無事に下山することだけを考えるようにした。

20分ほど歩いたであろうかようやく老人の村らしきものが見えてきた。あたりはすっかり日が落ち、暗闇が支配している。

「着いたぞ、あれがわしの村、「酒紋村」じゃ」

老人に案内されて、来たこの「酒紋村」と言う村は民家らしき家が10数軒あり、街灯や整備された道路などもあってそれほど侘しい所ではなかった。

「わしの家に来るといい、助けを呼んであげよう」

「本当にありがとうございます！あなたは命の恩人です！」

ほほと老人は静かに笑い自分の家へと足を進めた。

着いた先には古びた一軒家がありここが老人の家らしい。家の外観は相当年月が経ったらしく周りを取り囲む塀には苔が生えており木造の壁も所々剥がれており、庭にある古びた瓶には雨水が溜まり、陶器の破片らしきものが散乱していた。趣があると言えばそうかもしれないが、信二にはどこか腑に落ちない点があった。

「さあ古臭い家じゃが上がりなされ」

老人にそう言われると二人は靴を脱ぎ、言われるがまま上がり込み廊下を進んだ先にある居間らしき場所へ案内された。

「すみません電話を貸していただけませんか？警察や救助隊に連絡したいので」

「ああ、わしから連絡を入れておくよ。あんた達はここで休んでいなされ」

老人はそう言うと部屋から出て行き、あとに残された二人はとりあえずリュックを置き、適当に座り込んだ。

「よかったね信二！これで無事に帰れるよ」

「ああ……そうだといいいんだがな」

せつかく無事に帰れるのに信二はどこか鼻につく点があった。しばらくすると老人が戻ってきたが、その手には食事らしきものがあったトレーがあった。

「さあ食べなされ、腹が減っているだろう!？」

「わあ美味しそう、ありがとうございます。おなかペコペコだったんですよ」

目の前にある食事はごく一般的な米と味噌汁と焼き魚の料理であったが空腹も限界であったひとみにとっては大御馳走だった。

「何から何まですいません。警察には連絡してくれましたか!？」

「ああ、すぐにこちらへ向かうそうじゃ」

そう言われた信二はすっかり安心し、空腹も手伝ってか既に食べ始めているひとみに続き目の前にある食事に手をつけた。

「たくさん食べなされ……………童子様もきつとお喜びになるはずじゃ……………」

「えっ？何か言いました!？」

いやなんでもないと老人は言い、再び二人を残し部屋から出て行った。信二にはしばしの間忘れられていた不信感が蘇えり、食事を中断した。

「んっ!？どうしたの信二？食べないならあたしが貰っちゃおうよ」

「待てっもう食べるな! なっ・・・何かっ・・・が・・・変っ・・・!」

途端に信二の呂律が回らなくなり、続いて体に今まで経験したことのない感覚が襲いその場に倒れ込んだ。

「どろしたの信二!？信二!しっ・・・か・・・りして・・・信二い・・・」

ひとみの体にも変調が起こり始めそして信二と同じくその場に倒れ込む。二人の視界は霞み始め、今にも意識が遠のきそうだった。

「おやおやこんなに残して・・・全部食べないと駄目ではないか」

信二の霞みゆく視線の先には老人と数人の中年男達が手に何かの道具を持ち立っていた。

「なっ・・・何を・・・した・・・!？」

「言ったじゃろう童子様もお喜びになると。さあ皆運び出そう、童子様がお待ちかねじゃ」

「にっ・・・逃げろっ!ひ・・・とみ・・・」

逃げようにも体の自由は効かず、視界も定まらないので逃げようがなかった。さらに男達は二人を無理矢理立たせ、彼らの腕を後ろ手に拘束した。

「いっ・・・や・・・やめてえ・・・信二・・・助けて・・・」

「くそっ……はっ……なせ！ひとみ」

「三重県 松坂市 12月3日 9時45分」

「で……これが今回の仕事の内容ねえ」

三重県松坂市内のカフェのオープンテラスで晴と昭は今回の任務について話し合っていた。傍には2人の車である「1974年製シボレー・カマロ イエローカラー」が駐車されている。平日のこの日は客も少なく普段ならあまり公に話せない常人には理解できないような会話でも聞かれる心配はあまりなく、二人は堂々と話し始めた。

「最近御所山で行方不明者が続出している、その調査と原因説明が今回の仕事だ」

「でもよお、今はスキーや登山のシーズンだろ？ただ単に迷っただけじゃねえか!？」

晴の見解は強ち間違っではないなさそうだが、昭はその意見を真つ向から切り捨てた。

「行方不明者が例年の5倍近くいるのか？」

「5倍!?!?.....そつ.....そりゃあ変だな.....」

「.....任務内容をよく見ておけ」

「よしっ!善は急げだ。さっさと行こうぜ!」

晴はカップにある残りのコーヒーを一気に飲み干し、そして豪快にむせた。そんな晴を見て昭は含み笑いを浮かべ自分もカップに口をつけ一口飲んだ後席を後にした。目指す先は問題の御所山。



松坂市から車で1時間ほど行った先に御所山はある。現在の気温は7度、だが薄着の晴にとっては氷点下にも感じる温度だった。

「うう〜さみい〜」

「外見ばかりを気にしているからだ。自業自得だな」

晴とは対照的に昭はコートにマフラーとしっかり防寒対策をしている。

「うるせー、だったらそのコートかマフラーどっちか寄越しやがれ」

「断る」

二人はまず山を管理している管理組合の事務所へと向かうが、もちろん素性は隠し事件を捜査しに来た警察の人間を装う。しかし晴の今の格好では不審に思われるだけなので昭は自分一人だけで行き、晴を車の中で待たせることにした。

「ここで待ってる」

「はい、喜んで」

適当な相槌を叩き晴はシートを倒し横になった。

事務所の中は慌ただしくしており、電話越しに行方不明者の家族の対応をしているであろう職員や何やら興奮した様子で職員と話している女性などで落ち着かない状況下であった。昭は適当な人間を捕まえ、偽造した警察手帳を見せた。

「警察の者です。この山で起こっている行方不明事件について聞きたいのですが」

「少々お待ちください」

対応した男性職員は奥の部屋へと向かい、昭は近くの椅子に腰掛け、相変わらず事務所内は騒がしく、落ち着ける場所ではなかった。

しばらくするとこの責任者らしき眼鏡を掛けた中年の男性を連れ  
た職員が戻ってきた。

「警察の方ですね？どうぞこちらへ」

昭は事務所の奥にある個室へと案内された。

部屋の中は茶色の革張りらしきソファと茶菓子と灰皿の置いてあ  
る長机があり壁には見た目安物の時計と換気用の小窓があるだけ  
であった。

「この責任者の青木と申します。どうぞお掛けになってください」

昭が座ると同時にコーヒーの入ったカップを持った女性職員が部屋  
に入室し、昭と青木の前にカップを並べた。

「早速、最近ここで起こっている行方不明事件についてお聞きたい  
のですが」

「ええ、しかしつい4日前に警察の方がいらつしゃって散々聞かれましたが」

「申し訳ありません、上からの指示なので。無礼なのは重々承知しております」

普段、無愛想な性格からは想像もできないほど昭は丁寧な口調で喋り、見事に警察の人間を演じた。青木もわずかだが不信感を抱いてはいたがそれも消えた。

「例年よりも行方不明者が多いということですが、救助された人はいますか？」

「ええ、2週間ほど前に男性が1人山道に倒れているところを登山者が見つけました。お聞きになってないのですか!？」

「申し訳ありません。情報が錯綜しておりまして、まだ伝わってないことが多くあるのです」

昭はほとんど何も知らされていない新米刑事を演じ、さらに情報を聞き出そうとした。

「その男性は今どこに？」

「津市にある県立病院に搬送されたと聞きましたが」

「そうですね、ご協力感謝いたします」

昭は欲しかった情報を手に入れたらしく聞き込みを終了した。

「もういいのですか？」

「はいそちらも貴重な時間を無駄にはしたくないでしょう」

席から立ち上がり、昭は部屋を後にした。

事務所から出る途中、出口の傍にある掲示板の張り紙に昭は足を止めた。掲示板にはこの山の宣伝や付近の地図などが張ってあったが、昭はある一枚のポスターを見た。そこには「ようこそ」と書かれた

ある村のポスターだった。

その村の名前は「酒紋村」

何かを感じた昭は掲示板の前に置いてある机にあった村のチラシを手に取りポケットに入れた。

車に戻るとまだ晴は夢の世界におり、目を覚ます気配はなかった。昭は晴を起こそうともせずそのまま車のエンジンをかけた。その振動に晴は目を覚まし、まだ半開きの眼で昭を見た。

「おう、収穫はあったか？」

「目的地は決まった」

それだけ言うと昭は車を走らせ次の目的地である県立病院へと向かった。

「三重県 津市 12月3日 16時05分」

県立病院の駐車場に晴と昭の車は駐車していた。例の如く車中には晴がシートにもたれ掛かり寝ている。その顔を見た昭は溜息をつき、再びパソコンに眼を通した。

「んあっ・・・もう着いたのか!？」

「バカ、もう聞き込みは終わったところだ」

どうやら晴が寝ている間に昭はもう聞き込みを済ませてしまったらしい。しかし晴の顔には何の悪びれた態度も表れてはいなかった。

「で!?!なんか収穫あったか?」

「ああ、救助されたのは地元の会社員だ。趣味で登山をして遭難したらしい」

「他には!?!」

「不気味な村人に殺されかけて必死に逃げてきたと言っていた。それから……」

ピピピピピピ……ピピピピピピ……ピピピピピピ

昭が続きを言おうとしたとき突然彼の携帯が鳴り始めた。着信の欄には「柏木」の二文字がある。

「はい、桐島です。」

(昭か?突然ですまないが頼みがある。傍に晴もいるか!?)

「ええ……いますよ。何でしょうか!?!」



（実はお前達に新人の教育を頼みたいのだが・・・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3215i/>

---

アンチリアル

2010年10月9日06時45分発行